



吉備国際大学女子サッカー部 2011年チャレンジリーグWESTに参入

吉備国際大学女子サッカー部は2011年4月から、女子リーグ最高峰なでしこリーグの2部に相当する「チャレンジリーグWEST」に参入しました。5月9日現在、開幕4連勝で首位をキープし、リーグ初参戦ながら見事な成績を残しています。

もともと地域密着型のチームとして活動を続け、地元の少年少女サッカーチームとの交流、高梁日新高等学校女子サッカー部を下部組織に包括するなど、地域スポーツの活性化にも貢献してきました。

その他にも、大雪に見舞われた今年の高齢世帯への雪下ろしや地域の清掃活動など、積極的なボランティア活動にも取り組み、地域に元気を与えてきました。

その女子サッカー部がチャレンジリーグWESTへの参入を契機に、チームを育ててくれた地元高梁市をチーム名に組み入れ、新たに『FC高梁吉備国際大学(略称FC高梁)』として好スタートを切れたのも、地域の皆様の応援あってこそのごこと、チームメンバーだけでなく、学園関係者一同、深く感謝しているところです。

これからも秋までリーグ戦は続きます。地元高梁で開催の折りは、ぜひ会場までお越しいただき、地域の皆さんの熱い声援をお送りくださればと思います。これからも応援、どうぞよろしくお願いいたします。

今後の日程

- 5月29日(日) FC高梁 対 FC高槻 (神原スポーツ公園)
- 6月5日(日) FC高梁 対 静産大ク (神原スポーツ公園)
- 6月19日(日) J鹿兒島 対 FC高梁 (薩摩川内市)

ファンクラブ会員募集

本クラブチームはスポーツを通して、地域・企業・大学の三者が協働し社会貢献をするともに、高梁のみならず岡山を全国に発信したいと思っています。この機会に何卒ファンクラブへご加入いただければ幸いです。

- 会費 (1) 個人年会費【1口】 1,000円 (何口でも可)
(2) 法人年会費【1口】 10,000円 (何口でも可)
※入会金無料
- 会員特典 (1) FC高梁ファンクラブ会報の発行
(2) ファン感謝デーへのご招待 など

■問い合わせ・申し込み 吉備国際大学学生課 (☎27420・FAX28133)

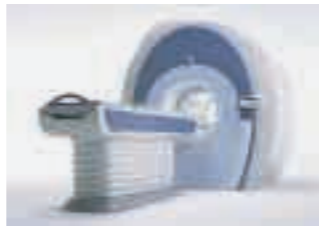


成羽病院通信

簡易脳ドック (脳MRI検査) を始めました。

成羽病院では、昨年導入した最新のMRI装置を活用した人間ドックのオプション脳ドック、脳MRI検査を主体とする簡易脳ドックを始めました。

脳卒中を未然に防ぐために、働き盛りの多忙な人も短時間で検査できる“簡易脳ドック”をご利用ください。



- 【検査内容】 身体計測・血圧測定・血液検査 (血糖・血中脂質)・脳MRI・脳MRA撮影
- 【検査時間】 約1時間15分
- 【検査料金】 簡易脳ドック：19,800円
人間ドック等のオプション脳ドック：19,000円
- 【予約】 ドックのご利用は予約制です。お電話、病院受付窓口にてお申し込みください。

脳卒中は、がん・心臓病と共に三大成人病といわれ、近年、医療技術がめざましい進歩を遂げる中でも、発症数・死亡数共に多く、しかもいったん発症すると後遺症が残りやすいので、社会復帰が困難になるケースも少なくありません。そのため、MRI装置を用いて脳の状態を確認することで、無症状のうちに病気を発見し、早期治療や発症予防につなげていくことを目的に「脳ドック」が全国でおこなわれています。

脳MRI検査では、脳動脈瘤 (りゅう)・脳動脈の狭窄 (きょうさく)・隠れ脳梗塞・脳腫瘍などがわかります。脳卒中は高血圧症や糖尿病、脂質異常症等の生活習慣病と深い関わりがあります。ご家族に脳卒中にかかったことがある人、原因のはっきりしない頭痛のある人に脳ドック受診をお勧めします。

■問い合わせ 成羽病院事務局 (☎423111)

地名をさぐる

七十六 高山市



弥高山から見た高山市の集落

今回取り上げる川上町「高山市」は、拙稿「地名をさぐる」(二十二回「高山」と関係している地名で内容も重なる部分があります。「高山市」は川上町の西の端にあって、吉備高原上の標高四五〇〜六〇〇メートル付近に位置しています。東に川上町高山・七地・下大竹があり、西には広島県神石高原町の豊松が、南には井原市芳井町が、北には備中町平川などがあります。

「高山市」の周辺は、吉備高原の小起伏の山々が広がり、小さな谷がくぼとなった多短谷が樹枝状に展開している。老年期の高原が広がる代表的な地域であり、「高山市」の集落の東側には、南からの千峯坂の断崖谷を埋めるように噴出した玄武岩の残丘といわれる弥高山(六五三メートル)がそびえています。弥高山の東方には同じく玄武岩の須志山(五二二メートル)がとがり、この弥高山や須志山の裾付近から東一帯には、山砂利層(礫層)高瀬層)が分布して「川上面」と呼ばれ、浸食小起伏面を研究する上で最も代表的な地域といわれています。「高山市」の集落から穴門山神社への参道入口付近には石灰岩のカルスト地形が見られ、大きなドリネ(凹地)があります。「高山市」の集落は、高原上の街村(列状村落)となっていて、集落には、東三原分(井原市芳井町)と高梁市の高山市分の境界線が複雑に錯綜しています。それは、近世中期から後期にかけて両村の利害が対立したことがあったと言われ「川上町史」によると「当時村高一三〇石余りの高山市村は、家数六一軒で、その内在方(町の中心から離れたところ)二一軒は農業で生計を立て、残りの四〇軒は穴門山神社の門前に軒を並べ、神社への参詣者を相手に商売を営むという町場的な様相を呈していた」ようで、これは高山市上市(東三原分)の百姓総代が、村内で穀物など扱う新規商売の差し止めを幕府に訴え出た争論文書の一部で、当時「高山市」で東三原村分と高山市村分の利害が対立して、「相手之者共家居、私共家並羽統候場所付、自当村市場商衰徴仕相統抱り難涉至極仕」(川上町史)などと東三原村が訴え



穴門山神社

ているのです。そして「高山市村」は、近世中頃に火災で町が衰微したが、明和年中(一七六四〜七一)頃に町並が復興して、備後の北部から備中南部への物資の移動が増大し、笠岡から東城往来もにぎわい、宿場として活気を取りもどすと、五の日の定期市(三斎市)が開かれるようになり、その上、穴門山神社の祭礼日の旧暦二月、一〇月の巳の日には近畿地方や瀬戸内地方からも商人たちがやって来て売買をしました。瀬戸内の海産物・綿・木綿、山間部からは、穀物・たばこ・楮・木炭などが集荷され「高山市」は広域的な市場集落として栄えました。この高原上の市場へ多くの物資が搬入されると、置き場がないため路上で販売したといわれます。今では町筋と当時の問屋や商いをしていた古い店の屋号、商売繁盛のえびす宮のみが往時をしるばせてくれています。

江戸時代から大正時代まで栄えた「高山市」は、穴門山神社の門前町として、高原上の物資輸送の中継地として、宿場町として、また、市場町として大変栄えていたのです。明治から大正の頃には、備中煙草と江戸時代末頃からの高山牛の飼育、売買も盛んで、いつそう「高山市」はにぎわいました。水谷勝隆が成羽へ入封した寛永一六年(一六三九頃)には、高山村のうち松山藩領分高一〇三石余りが「高山市村」分となっていました。「正保郷帳(一六四五〜四六)」では、幕府領「備中村鑑」万延元年領一八六〇頃)では、布賀村陣屋旗本水谷領となっていました。「高山市」の集落の北、約一キロの谷筋に穴門山神社が鎮座しています。赤浜宮とか名方浜宮と呼ばれ、平安時代の創立といわれ、古代の自然崇拜を思わせる鍾乳洞もあり、拝殿には神仏習合の様式をただよわせる柱の装飾や肥後の国の大工の名が記録された格天井の絵、そして藻段の彫刻、忍冬(すいかずら)唐草文様の虹梁などなど彫刻装飾が多く県指定の文化財となっています。この神社は寛永九年(一六三二)に本殿や末社など焼失して、現在の本殿は松山藩主池田長綱によって再建されたもので、三間社流造で、彫刻装飾がみごとで県の指定となっています。

「高山市」という地名は、この地域のシンボルとなっている弥高山(高山)「神の山」と「市場集落」市場として栄えたところからついた地名なのです。(文・松前俊洋さん)